

*** 今日の健康(12月)***

< 反復性腹痛 (その1) >

反復性腹痛とは、少なくとも3カ月の期間にわたってくり返し3回以上起こる腹痛のことをいいます。学童の10人に約1人の割合で再発性の腹痛があります。これは8～10歳の子供に最も多くみられ、4歳未満ではまれです。反復性腹痛は男子よりも女子にわずかに多く、青年期初期の女子にはかなり多くみられます。

< 原因 >

原因の多くは、不安や、学校、友人、両親、家族間におけるストレスが原因で生じた心理的な悩みと考えられます。これを起こす子供はそのかなりの数がうつ状態と診断されることがあります。また約10人に1人は、身体的原因として消化管や尿生殖器管の病気など明らかな疾患があります。

身体的原因がない大半の子供の場合、親や周囲はときどき対応に悩まされます。親や教師が心配している反応をみせると、子供がストレスの原因になっている状況を都合よく変えられるように、痛みが良くなったり、逆に悪化したりすることがあります。

家庭では親に関心を持ってもらうため、夫婦喧嘩や家庭内の不穏な空気から逃れたいとき、学校での教師や友人との上手くいかない人間関係等のストレスのある状況から逃れたいときに、不安を解消するのに最も効果的な方法なのです。

ここで重要なことは、多くの子供は自分の悩みを親や教師に伝えるために、腹痛という症状を訴える手段として意図的に使っている仮病ではないという点です。腹痛は感情面の不安により生じる本物の重要な症状なのです。反復性腹痛の最も深刻な原因は、性的虐待ですが、学校や家庭での日ごろのストレスの方が、反復性腹痛の原因としては性的虐待よりはるかに多くみられます。



< 症状 >

身体的原因による反復性腹痛は、食道・胃・腸・肝臓・膵臓等の消化管疾患、膀胱炎や腎炎等の泌尿器疾患、女児では生殖器の発達に伴う異常、他にアレルギー、遺伝性疾患など多種多様です、一般に予測可能な時間や同じ状況のときに再発することが多いです。特定の活動や食物によって引き起こされたり、数日から数カ月にわたって悪化したりすることもあります。不眠、食欲減退、体重減少、便通の形状や色の変化、便秘あるいは下痢、食物や血を吐くこと、頭髪や眉毛が抜け落ち、腹部の腫れ、時に黄疸、排尿時の不快感などの症状があります。

明白な身体的原因のない反復性腹痛は、一般に予測可能な時間や同じ状況下で起こることはそれほどありません。このような腹痛はしばしば漠然とした言い方で表現され、ときには数週間や数カ月間で消えます。子供の睡眠を妨げることはめったにありませんが、早く起きるようになることはあります。子供が遊びに夢中になっているときなどは、痛みから気がそれていることがしばしばあります。このようなことは身体的原因のある痛みではあまり起こりません。

参照：Merck & Co., Inc., Whitehouse Station, N. J., U. S. A.

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏

*** 今日の健康(1月)***

< 反復性腹痛 (その2) >

< 診 断 >

親と子供に痛みの特徴や痛みと一緒に起こる症状について、一連の問診をします。特に母親から日常生活について細かく聞き取りを行います。身体的原因の手がかりを探るために、通常の診察以外に身体に負担のかかる採血、尿、便からの感染症検査、必要に応じて器質的疾患を調べるために大腸鏡や内視鏡検査も行われます。

問診に対する子供の応答や質問の際の親と子供の様子を観察するだけで、心理的な原因の可能性を強く疑える場合があります。反復性腹痛の症状にうつや不安が伴っている頻度の高さを考慮すると、心理学的な評価が最も重要な検査だとみなされています。

< 治 療 >

身体的原因による反復性腹痛の場合は、その原因である病気の治療を行います。

身体的原因のない腹痛がある子供は、心理的な要因を慎重に検討する必要があります。幼児では、不安な点を上手く表現できなかったり、学童になると不安な一方、変な正義感から医師に告げ口していると人に思われなくなかったり、なぜか両親や友人をかばって本当のことをなかなか言えなかったりします。年齢が上がるに連れて、話してしまうと返って自分が不利になると感じたり、自分の中で解決しようとしたりする傾向にあり、医師との信頼関係の構築に時間が係る場合があります。家庭内の虐待や学校での虐めではストックホルム症候群的な感情が見え隠れすることもあり、隔心に触れる繊細な内容では、1週間ごと、1カ月おきなど定期的に決まった間隔で医師の診察を受けると効果がある場合があります。



抗うつ薬や抗不安薬を処方する例もあります。この治療法で、子供の症状は回数が減るか現れなくなることがありますが、それが必ずしも成功とはいえません。新たに別の身体症状や感情面の問題を抱える子供もいますし、解決されていない感情面の問題を頭痛などの別の症状で表す子供もいます。手を尽くしても痛みが消えない場合、特に子供が非常にうつ的な状態にあったり、家庭に重大な心理的問題があったりする場合には、子供は精神保健の専門家に診てもらう必要があります。

子供は学校を含め、日ごろのすべての活動に復帰できるよう援助を受ける必要があります。教師は、子供が友人との活動に参加しなくなることに歯止めをかけ、さらに学校にかかわるもめごとを解決できるよう手助けする重要な役割を担っています(が現実はそのうはいかないケースが多い)。痛みのために授業に参加できない子供は、限られた時間だけ保健室に行くことを許可する必要があります。親の許可があれば、学校所属の養護教諭は、子供にイブプロフェンやアセトアミノフェンなどの穏やかな効き目の鎮痛薬を必要ときに与えることが可能です。治療の最初の1〜2週間は、子供は1日に1回かそれ以上保健室に行きたいというのが典型的です。時間がたてば、この行動の頻度は低くなります。一般に、親が子供を特別扱いしたり病気扱いしたりするのをやめると、心理的原因による痛みはいったんは悪化しますが、その後改善します。

参照：Merck & Co., Inc., Whitehouse Station, N. J., U. S. A.

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏